

### 第3回 記者懇談会実施要項

- 1 開催日時 平成8年5月30日(木)  
午後3時から
- 2 場 所 関大・千里山キャンパス内  
100周年記念会館第2会議室
- 3 懇談内容
  - (1) 若手研究者の研究テーマとその成果の中間発表(15時~15時30分)  
文学部教授 木庭元晴  
研究テーマ「徐々に沈降するマーシャル環礁群にみられる3500年前の高海面」  
総合情報学部教授 山名(岩田)年浩  
研究テーマ「やればやるほど成果の上がる授業とは」
  - (2) 学内情報(15時30分~16時)
  - (3) 情報交換(16時~16時30分)
- 4 関西大学の出席者  
石川 啓 学長  
月岡利男 広報委員長  
鈴木俊光 教学部長代理  
林 英夫 教学部長代理  
木庭元晴 文学部教授  
山名(岩田)年浩 総合情報学部教授  
北村 博 企画室長  
荒木紀忠 広報課長
- 5 配布資料
  - ① 記者懇談会実施要項
  - ② 木庭元晴教授の発表資料
  - ③ 山名(岩田)年浩教授の発表資料
  - ④ 1997年度入学試験概要
  - ⑤ 『関西大学通信』第245号(5月号)
  - ⑥ 『KU SCRAPBOOK Vol.2』

以上

## 「徐々に沈降するマーシャル環礁群にみられる3500年前の高海面」

文学部教授 木庭 元晴

約1万8千年前以降、海水準は急激に上昇して現在に至る。この上昇過程は地域によって異なるとする説が今や有力であるが、海岸や地球の環境形成史を編むうえでこの変動史を編むことは重要なことである。現在の海岸に残された過去の海水準の記録は、陸と海水準の変動の代数和であり、海水準そのものの変動を海岸に残された記録（相対的海水準変動）から復元することは極めて難しい。

マーシャル諸島の環礁群は世界でも数少ない垂直変動速度の遅い地域である。少なくとも人類紀である第四紀以来、年間およそ0.05 mmの速度で一貫して沈降傾向を示しており、海水量の変化に基づく海水準の変動（ユースタシー）を捉えるのには格好の海域と言えよう。この海域では長く完新世後期の高海水準が想定されてきたが、1970年のCARMARSEL Expedition 以来、現在の海水準が最も高いとされてきた。1974年に Tracey and Ladd によってエニウエタック環礁から高位の原地性サンゴが見いだされて後も、CARMARSEL Expedition の認識は広く研究者によって受け入れられてきたのである。

報告者はマジュロ環礁の浅層ボーリングによって、サンゴ小島に埋没された高位礁原を復元した。そして放射性炭素年代測定によってこの年代を決定した。この結果は、3500年前に現海面より高い海水準が存在したことを示している。琉球列島は変動地域ではあるが、Koba (1982) は琉球に共通する3500年前の高海水準を報告しており、琉球とマーシャル諸島に共通の高海水準が得られた。

なお、地球温暖化と環礁地域の海進対策にも触れる。



こ げ 木庭 元晴

教授

1949年京都府生まれ。鹿児島大学在学中に南西諸島のサンゴ礁の美に魅せられ、一生をサンゴ礁研究に捧げようと決意されたサンゴ博士である。その後、東北大学大学院で、サンゴ礁を指標とする南西諸島の地形発達史の研究を進められ、島々をくまなく調査して、離水サンゴ礁形成のメカニズムの解明に取り組まれた。南米チリ、台湾、ハワイ、ギリシア、マーシャル諸島などの海岸段丘の年代を決定されたり、インドネシアバリ島のサンゴ礁の環境評価をされるなど数々の業績を挙げておられる。ESR年代測定法という当時の最新の手法による研究で朝日学術奨励金を受けられた。

野外調査のベテランだが、文献の方も極めて博く渉猟され、海外との学術交流も多くの国々に及んでいる。資性明朗闊達、行動力に富まれ、学生の面倒もよく見て下さる方である。

「やればやるほど成果の上がる授業とは」

—どんな仕事をしているか—

総合情報学部教授 山名（岩田）年浩

経済学教育論という日本では誰も専門にしていけない分野をやっています。これは私にとって、研究と教育が一致することを意味します（実際には研究と教育は分離しているのが一般）。

よく教育というと教育の方法や手段のことと捉えがちですが、私は経済学の分野で何をもどのようにどこまで教えるべきかに眼目を置いてやっています。

4年前よりマスコミで取り上げられた、アフター5の“課外授業”は大学の外の生活でも上記の精神で見聞や経験を得ようとして始めたものです。

専門： マクロ経済学／現代経済論／経済学教育論

著書： 「経済学ゼミナール」

「経済学教育論序説」

「もうひとまわり賢くなる経済知識」

「経済を学ぶ、経済を教える」 ほか6冊

所属学会 理論計量経済学会、経済学教育学会等

海外活動 テネシー大学チャタヌガ校（アメリカ）

ニューサウスウェルズ大学（オーストラリア）

安徽財貿学院（中国）で研究・講義活動

1946年（昭和21年）京都市に生まれる

（メモ）

大学の教職について16年、聞く人をどれだけひきつけるかの努力を重ねてきた人、ここ数年来、マスコミでは“スナックで講義をする先生”として注目をあびてきた。日本の大学ではもっとも講義のうまい先生の一人です。特に大学生、ビジネスマン、経営者など大衆の中にとけ込み、何が悩みか、何がわかっていないかに対応するのが得意。年間の学外での講義は50回を越える。



やまな としひろ  
山名 年浩  
教授  
(別名、岩田年浩)

1946年京都生まれ、大阪育ちで、大学院は神戸商科大学（博士課程）というから、文字通り京阪神で生きてきた人です。

もともと、マクロ経済動学を専攻しており、この分野を中心に著書5（『経済学教育論序説』青木書店・『経済学ゼミナール』日本実業出版社など）・分担執筆書3・翻訳書1・読物1（『したたか教授のキャンパス・ノート』学文社）冊と書くことに熱中してこられた。

前任校の大阪教育大学時代から、草の根学習をポリシーに、街の酒場で“出前の大学講義”を続け注目を集めた“異色のプロフェッサー”である。本学において、研究や教育の分野でこのパワーがどれだけ発揮されるかが期待されている。